

式亭三馬『浮世床』『四十八癖』に見られるオノマトペ  
——『浮世風呂』との比較を交えて——

中里 理子

佐賀大学全学教育機構紀要 第11号  
Journal of Organization for General Education  
Saga University  
Volume 11, 2023

## 式亭三馬『浮世床』『四十八癖』に見られるオノマトペ —『浮世風呂』との比較を交えて—

中里 理子

A Study of Onomatopoeias in “Ukiyodoko” and “Shijyuhachikuse”  
by Shikitei Samba: Comparing with “Ukiyoburo”

Michiko NAKAZATO

### 【要 旨】

式亭三馬の滑稽本『浮世床』『四十八癖』のオノマトペを調査し、『浮世風呂』との比較を交えてオノマトペの特徴をまとめた。いずれも作中のセリフの割合が高いためにセリフのオノマトペが圧倒的に多い。地の文・ト書きを見ると、『浮世床』では髪結という場を表す音はなく場面を表す市井の音が数例ある。『四十八癖』では場面を表す音はなく人物の動きに関する音がある。擬態語は人物の外見、様子、動きに関するオノマトペが各作品に見られた。セリフの場合、擬音語は多種多様な笑い声、ゲップ等の汚い音、舌打ちや咳払い等の表情音、三味線等の口真似、言葉遊びが見られる点が特徴である。汚い音は『浮世風呂』と並んで『浮世床』に多く見られた。擬態語は人物の様子や動き、心情、感覚に関するオノマトペが見られ、セリフ内で人物描写が生き生きとされていることが窺える。『浮世風呂』と同じく『四十八癖』では外見を表す語も多い。また、セリフではオノマトペが勢いをつけるための一種の強調表現として用いられる例が多い。

【キーワード】 擬音語 擬態語 人物描写 笑い声 表情音

### はじめに

近世の滑稽本には多くのオノマトペ（擬音語・擬態語）が見られる。筆者は滑稽本のオノマトペの使用状況を知るために、すでに十返舎一九の『東海道中膝栗毛』、式亭三馬の『浮世風呂』のオノマトペを整理した<sup>1)</sup>。今回は、式亭三馬の『浮世床』『四十八癖』を対象に、作中に見られるオノマトペの特徴について整理したい。

長崎靖子（2018）によると、式亭三馬は「言語描写へのこだわり」があり、表記面で「白圀（しろきにごり）」などの工夫が見られるだけでなく、語彙面においても「片言や大和詞、浄瑠璃社会の隠語であるセンボウ等を駆使し、登場人物の特徴を表す描写に利用して」いるという。このように、人物の話し言葉に関心を寄せている三馬が、どのようなオノマトペを

用い、どのような効果を上げているのかを探り、三馬のオノマトペの特徴を見出すことが本稿の目的である。そのため、先に調査した『浮世風呂』のオノマトペと適宜比較して各作品の特徴を見たとうえで、式亭三馬作品のオノマトペの特徴を整理する。

滑稽本のオノマトペを整理した先行研究に天沼寧（1977）、酒井知子（2019）がある。酒井は『浮世風呂』に見られるオノマトペについて、形態と意味の面から『日葡辞書』『安愚楽鍋』と共通している語・異なる語を整理している。一方、天沼は『東海道中膝栗毛』を取り上げ、擬音語と擬態語とに分けて、主に表記面から特徴を整理している。本稿では天沼に倣って、擬音語・擬態語に分けて特徴を整理する。また、本稿では、地の文・ト書きとセリフとに分けて擬音語と擬態語について考察したのち、全体の特徴をまとめる。

本稿では和語系オノマトペを対象とし、「ほう／＼」「滔々」のような漢語由来のオノマトペは別に扱う。抽出に当たっては近世のオノマトペも収録している『日本語オノマトペ辞典』、及び『現代擬音語擬態語用法辞典』を参考にして、両辞典に掲載されていない語は『古語大辞典』等によって個別に判断する<sup>122</sup>。なお、「べん／＼が聴きたくなる」（べんべん＝三味線）のように名詞形になっているものは扱わない。抽出の際は、「ふと」「さつと」のように1拍・2拍のオノマトペは後接する助詞「と」までを記す。繰り返し記号は便宜上「／＼」と表記する。

調査対象としたのは、新潮社の新潮日本古典集成『浮世床・四十八癖』<sup>123</sup>である。『浮世床』は、初編三冊と二編二冊が式亭三馬作、三編三冊は滝亭鯉文作とされる<sup>124</sup>が、新潮日本古典集成には初編と二編が採録されているため、式亭三馬作の部分を調査対象とする。

## 1 『浮世床』のオノマトペ

### 1.1 擬音語・擬態語別の語数

『浮世床』は、髪結床に集まる人々の話を記したものである。地の文、ト書き、セリフに見られたオノマトペを擬音語・擬態語に分けて延べ語数を示し<sup>125</sup>、（ ）内に異なり語数を示す。

地の文	擬音語：1（1）	擬態語：1（1）
ト書き	擬音語：7（7）	擬態語：17（14）
セリフ	擬音語：90（44）	擬態語：111（76）

作品全体のオノマトペの総数は227語で、擬音語98、擬態語129である。地の文とト書きは、擬音語・擬態語ともにセリフに比べて格段に少ない。作品全体がほとんどセリフからなっているためであるが、オノマトペ全体の九割近くがセリフに見られる。セリフでは、擬音語は異なり語数に対して延べ語数が多く、同じ語が何度も使われていることがわかる。それに対して、擬態語は異なり語数の割合が高く、複数回使われる語が少ないことがわかる。稿末の表1に『浮世床』のオノマトペを部分ごとに整理した。

以下、「地の文・ト書き」と「セリフ」に分けてオノマトベを見ていく。なお、上記以外に、序に「どつと・ピヨイと」の2語が、挿絵の説明部分に「ちよびと」1語が見られるが、本稿では扱わない。

## 1.2 地の文とト書きのオノマトベ

地の文とト書きの擬音語は、稿末の表1に見るように、「ゴラン」（鐘の音）、「ポンと」（六つの鐘）、「キャン」（踏みつけたときの犬の声）など、場面の状況が伝わるオノマトベがいくつかわかれているが、『浮世風呂』と比べると非常に少ない。また、『浮世風呂』では銭湯の場面らしい音として、水や湯をかける「ざつぷり」、合図のために羽目板を叩く「トン」「トン／＼」「トン／＼／＼／＼」、下駄をはく「がた／＼／＼」などが見られたが、『浮世床』では髪結床らしい音は表現されていない。

地の文の擬態語は「べつたり」（張り紙に書いてある様子）1例である。ト書きの擬態語は、1例（「ずつとのあと<sup>266</sup>」）を除いて16例が人物の外見や様子、動き<sup>267</sup>、心情に関するオノマトベであった。ト書きの擬態語16例を整理すると以下ようになる。数字は複数例見られた語の用例数を表す（以下同じ）。

外見：ふつくり ばらり むしやくしや

様子：けろり とつちり ひよろひよろ べたり／＼

動き：ずつと2 そつと2 ちよいと よろ／＼

心情：ぎよつと びくり びつくり

以下、用例を挙げながら人物描写について見ていきたい。

- (1) 水髪に結ひて、たほをふつくりと出し、はけさきをばらりとちらして（初編上）
- (2) あたまはさかやきほう／＼、ひげむしやくしやとして、じじむさき事はんかたなし。  
（初編上）
- (3) 門に立ちて、日向ほこりしてゐたる男、ずつと内へはいり、（二編下）
- (4) 飛助といふ人、酒にとつちり酔つてよろ／＼としながら来たり、敷居のきはにてひよろ／＼となり（初編下）

例（1）～（3）は髪型などの外見が描かれている。様子や動きは、例（3）「ずつと」のような勢いの良さや、例（4）のよろめく様子が見られる。心情はすべて驚きを表す語である。『浮世風呂』にも人物の心理や性格がうかがえる語が多数あり、落ち着かない様子の「うそ／＼」「きよろ／＼」、勢いの良い動作を表す「ぐつと」「ずつと」、素早い動作を表す「さつさと」「ひよいと」「ひらり」、密かに動く様子の「こそ／＼」「そつと」、意気消沈する「ぐんにやり」、愛想のよい「にこ／＼」、驚く様子の「びつくり」、心配する様子の「は

ら／＼」など40種類の擬態語が用いられていた。これらに比べると『浮世床』のト書きはオノマトペも少なく、人物の描写は多いとは言えない。『浮世床』ではセリフの言葉遣いや内容で人物を描写しているのであろう。

### 1.3 セリフのオノマトペ

本田康雄（1982）は『浮世床』を「下町のどこにでもありそうな髪結床を舞台に極くありふれた庶民の類型が生地のまま登場し、駄洒落をとばしたり、人の批評をしたり、無駄話をして時間をつぶしている。つまり髪結の順番を待つ間の時間つぶしの話が列挙されて」いると評しているが、本作には『浮世風呂』以上に人物のセリフが多い<sup>38</sup>。

まず擬音語は、他の滑稽本と同様に笑い声のオノマトペが多く見られる。表1でセリフの擬音語の初めに笑い声をまとめてあるが、以下のような11種47語が見られた。

アハ、、、8 アハ、、、、3・アハ、ハ、、 エヘ、、、 ハ、ハ、、、7  
ハ、、、14 ハ、、、、ハ、、、アハ、、、ヲホ、、、、ヘ、4  
ヲホ、、、2 ヲホ、、、4

これらは、登場人物の笑い声を活写したものだが、「折々大きやかなる声でかや／＼と笑つて（二編下）」のように、話し手が物語の中で描写する笑いが1例あった。三馬の『浮世風呂』に見られる笑い声は、異なり語数42語、延べ語数143語で、セリフの擬音語の65%を占めていた。本作の笑い声は『浮世風呂』よりは少ないが、セリフの擬音語90語の約半数を占めている。滑稽本では笑い声を多用して、にぎやかで楽しい雰囲気を与え、笑いを誘っていると思われる。

笑い声以外では、ゲップや嘔吐、唾といった汚い音、舌打ちや咳払いなどの表情音<sup>39</sup>、口真似や言葉遊びが特徴的である。セリフの中で擬音語が使われる場合、一般に「何所ともなしにざわ／＼ざは／＼と音がするから（初編中）」のように、話を伝える際に音の描写として用いるが、滑稽本では楽器などの音を口で真似る音（ここでは口真似とする）が多く見られる。以下にこれらのオノマトペを示す。（ ）内には、擬音語の内容を示す（以下同じ）。

汚い音：ゲイと（もどす） ゲイ引（ゲップの音） ゲロ／＼／＼（嘔吐） ピヨイ（唾）

表情音：チヨツ（舌打ち） 8 エヘン（咳払い）

口真似：すてゝこすてゝこ（太鼓） すてゝこてんてこてんとんとん（太鼓と三味線）

ツ、テン／＼（三味線） テテンテン／＼（三味線）

言葉遊び：チウ／＼のチウ（鼠泣き）

『浮世風呂』にもゲップの音が4種類（ゲイツプウ4、ゲイ引、ゲイフウ2、ゲイ引ウツプウ）、延べ数では8語見られた。『浮世床』ではゲップは1例だが、『浮世風呂』には見られなかった嘔吐の音や唾を吐く音が見られた。さらに本作では、ゲロが流れ落ちる様子を「だ

ら／＼／＼」と擬態語で表現している。また、舌打ちの音が8例（人物は6名）見られるが、細かい音までセリフの中に写し取っていることがうかがえる。

口真似は三味線の音が多いが、他の滑稽本にも三味線の口真似は多く見られた。当時の人々が三味線に親しみ口ずさんでいた様子がうかがえる。動物の鳴き声は他の滑稽本と同様に犬と猫が見られた。また、言葉遊びとして「チウ／＼のチウ」があるが、他にも多くの言葉遊びが見られる。

(5) 上り「おまへひとりで行かうとは（中略）男の膝にくらひ付き、わんとばかりに泣しづむ、ワワンワン／＼／＼／＼」（初編上）

(6) 長「なんだニヤアだ。古風に泣くぜ。あんまりおさだまりだ。ワンとでも泣いてくれりやア、見せ物師に売つておかまを起こすに」短「うさアねへ。いつその事ニヤンと号けるがいゝ」長「ウムこいつアいゝ。ニヤンとせう」短「ニヤンとせうでは、五大力のやうだ」（初編中）

例（5）は、人が泣く様子を犬の鳴き声に真似たものと考えられる。浄瑠璃で泣き伏す際には「わんと」という表現は見られず、「わつと」などとなるからである。例（6）は猫が実際に「ニヤア」と鳴いたのに続くセリフである。「ニヤア」「ワンと」と鳴き声を真似しつつ、「ニヤンとせう（なんとせう）」とふざけている。なお、オノマトペとしての働きがないため、波線部はオノマトペとして数えていない。

次に擬態語についてだが、『浮世風呂』に見られたような人物の外見を表す語はほとんど見られず<sup>注10</sup>、人物の様子や動き、心情、感覚に関するオノマトペが多い<sup>注11</sup>。以下に、主なものをまとめる。

様子：うかり うろ／＼ きよろり そろそろ2 まご／＼

動き：ずつと2 さつさ3 ちよいと5 ふいと

心情：くさ／＼ しゆつと にこ／＼2 びつくり むつと

感覚：がた／＼がた／＼ がつかり さあつぱり さつぱり ぞく／＼

様子を表すオノマトペは「一生涯うろ／＼まごつきあるいて（初編下）」「こつちはとちり切つてまご／＼狼狽へる（初編上）」のように、落ち着きがなく頼りない様子を表す語が目立つ。動きは、「（刀を）ずつと渡して（二編上）」のような勢いの良さや、「（駕籠かき）さつさとかけたはゑいが（初編中）」「その手で襟をちよいと合せて（二編下）など素早さを表す語が多い。心情と感覚は、プラスの意味を表すの「にこ／＼」「さあつぱり」「さつぱり」の3語で、それ以外はマイナスの意味となっている。以下、現代語になじみがない語も含めていくつか用例を挙げる。

- (7) それだから変助さんも、くさ／＼として倦果てたのよ。(二編上)  
 (8) ゑらいドス声できめをつたによつて、わしもしゆつと消えて仕舞た(初編中)  
 (9) 夏右衛門親子の者もがっかりいたしまして、気ぬけのやうに成りまして(二編下)  
 (10) 朝飯をたべねへうちは、仕事をするにもぞく／＼いたします(初編上)

例(6)「くさ／＼」は現代語の「くさくさする」に近い。例(8)「しゆつと」は「しゅんとなる」様子を表す<sup>註12</sup>。例(9)「がっかり」は、意気消沈というよりは力が抜けて呆然とする感覚を表している。例(10)「ぞく／＼」は「がた／＼」震える様子に近く、寒気がする様子を表す。

以上のほか、人に関するオノマトペに、話し方に関する「ぶつ／＼」「ぺら／＼」「ほい／＼」が見られる。「ほい／＼」は「悪態ばかりほい／＼ほやきくさつて(初編中)」と用いられる。話し方に関するオノマトペは、『浮世風呂』でも「いび／＼」「ぐち／＼」「ベエら／＼」など10種類11例が見られ、三馬の滑稽本の特徴の一つであると言える。

擬態語では、他に強調表現となる「ぐつと」4例「しつかり」4例「とつと」5例が見られた。以下に1例ずつ挙げる。

- (11) 占者のやうな形で頭陀袋をグツト首にかけて(初編下)  
 (12) 焼筆の痕がしつかり残つて、イヤハヤ見られた物ぢやねへ。(二編下)  
 (13) 云ふても詮がないさかい、トツト放置くがゑいはいの(初編中)

例(11)「ぐつと」(12)「しつかり」はどちらも状態を強調する働きをしている。「ぐつと」は「力を込めてする様子」、「しつかり」は「固く強い様子、安定」という意味<sup>註13</sup>だが、ここでは本来の意味が薄れており、「力強く」「確実に」という強調表現となっている。例(13)「とつと」は5例とも上方者のセリフで用いられ、話に勢いをつけるリズムを表している。このように、実質的な意味が薄れたオノマトペを強調表現として用いて会話に勢いをつけている。

## 2 『四十八癖』のオノマトペ

### 2.1 擬音語・擬態語別の語数

『四十八癖』は『日本古典文学大辞典』に「世間の類型的人物の気質や言葉遣い、その種の人によくみられる状態、場面をありありと現わすことに主眼があったようである」<sup>註14</sup>と解説されているが、人々の様子を表す際にオノマトペがどのように用いられるかを見ていきたい。なお、『四十八癖』は四編あり、『浮世床』二編と比べて巻数は多いが、古典文学集成本では分量にそこまで大きな違いはない<sup>註15</sup>。『浮世床』と同様に。地の文、ト書き、セリフに見られたオノマトペを擬音語・擬態語に分けて延べ語数を示し、( )内に異なり語数を示

す。

地の文 擬音語：2 (2)      擬態語：8 (8)  
ト書き 擬音語：16 (10)      擬態語：21 (14)  
セリフ 擬音語：81 (42)      擬態語：160 (99)

作品全体のオノマトペの総数は288語で、擬音語99、擬態語189である。『浮世床』と同様、『四十八癖』もセリフ部分が多いためか、地の文とト書きのオノマトペはセリフに比べて少ない。オノマトペ全体の八割強がセリフ部分に見られる。稿末の表2に『四十八癖』のオノマトペを部分ごとに整理した。

以下、「地の文・ト書き」と「セリフ」に分けてオノマトペを見ていく。なお、序の部分に「べん／＼だらり」「ばつちり」の2例が見られたが、本稿では扱わない。

## 2.2 地の文とト書きのオノマトペ

まず、地の文とト書きの擬音語は、稿末表2に見るように、1例(鼠が騒ぐ「から／＼」)を除いてすべて人の動作に関わるものである。以下に残り17例を整理する。

足音：ばた／＼ 4  
火打石：カチ／＼ 2    カチ／＼／＼カチ／＼／＼／＼  
戸を叩く：トン／＼    トン／＼／＼／＼ 3・トン／＼ トン 1  
その他：がたびし(障子)    キイ／＼(言う)    ぐわつたり(肩を戸で打つ)  
          ごし／＼(米を研ぐ)    バタリ(煙管を置く)

用例数の多い「ばた／＼」は、梯子を上がる音、かける音、足を踏み鳴らす音などである。『浮世風呂』『浮世床』とは異なり、舞台を設定している作品ではないため、風呂屋の様子や町中の様子を表す音など、話の舞台をイメージさせる音は出てこない。人物の癖を描写する作品として人物の動きに伴う音を表す語が多い。

次に擬態語を見ると、擬音語と同様に人物描写が中心で、1語<sup>注16</sup>以外はすべて人物描写となっている。『浮世床』では、外見、動き、様子、心情に分けて見たが、『四十八癖』でも同様に分けることができる。

外見 たつぶり    ちよいと    ばち／＼    ぱらり    びら／＼  
様子 どつび／＼    ぶらり    ぼち／＼  
動き ぐつと    ころり    サアト    ずうい    すつと 2    そつと    ツイと    ひよいと  
          ぶら／＼    べつたり    ぺろり    むしやり／＼  
心情 びつくり 6

擬態語のうち、外見を表すオノマトペはすべて地の文に見られた。ト書きは様子や動きを



表すオノマトベが多い。以下に人物を表す擬態語の例をいくつか挙げる、

- (14) 髪の毛のうすいくせに前髪をぱらりと切つて、(中略) 髻のうしろへ帽子針よりちい  
さきぴら／＼のかんざし、(中略) 黄楊の水櫛を横の方へちよいとさし、(三編)  
(15) 片手を手すりへかけながら、一つぺんずういと見わたし、(二編)  
(16) 左のゆびをひろげて、手をツイとつき出すくせあり。(二編)

例(14)は地の文、(15)(16)はト書き部分である。ト書きには人物の様子・動き・心情を表すオノマトベが『浮世床』以上に多く見られる。ト書きはもともと「歌舞伎の台本で、台詞以外の演技・演出等の説明を記した部分」<sup>註17</sup>である。本作品は先に見たように「類型的な人物の気質や言葉遣い」「状態、場面」を描き出すことに主眼が置かれているので、特徴的な人物像を地の文やト書き部分でオノマトベを用いながら写實的に描いているのであろう。

### 2.3 セリフのオノマトベ

まず擬音語を見ると、他の滑稽本や『浮世床』と同様に笑い声のオノマトベが多く見られる。表2でセリフの擬音語の初めに笑い声をまとめたが、以下のような10種33語が見られた<sup>註18</sup>。

アハ、ハ アハ、、、2 アハ、、、7・アハハ、、、1 アハ、ハ、、 ハ、、、5  
ハ、、、10・ハ、、ハ、2 ヘ、ヘ、ン ヲホ、、、 ヲホ、、、

『浮世床』に比べると種類と総数が少ない。『浮世床』では庶民が無駄話をして楽しんでいる様子を描き、人々の笑い声が多く見られるのに対して、本作は人物の特徴を描くことに主眼が置かれているためであろう。

笑い声以外では、『浮世床』と同様に舌打ちや咳払いなどの表情音、口真似や言葉遊びが特徴的である。

表情音：ウツ4 (息をのむ音) エヘン3 (咳払い) チヨツ9 (舌打ち)  
口真似：ゲイ引(ゲップ) チリ／＼チリツ(三味線) チヨン(木の頭)  
ツン／＼(三味線) ニヤアフウ(猫)  
言葉遊び：チウ／＼ちゆうつ(雀) チウ(雀)

なお、『浮世風呂』や『浮世床』に見られた汚い音は、本作ではゲップの口真似が見られただけである。表情音などの例をいくつか挙げる。

- (17) 座頭といふ肴を皆しめられたから納らねへ。チヨツ、悔むべからず。(二編)  
(18) 二階で半裏さんのゲイ引が聴えやした。(二編)  
(19) アいたこできなさいチリ／＼チリツなど、<sup>うはき</sup>浮虚の沙汰ぢやアねへ(四編)

(20) 鮑貝とはいはねへな。畜生めありがてへ、ニヤアフウ ト猫のまね (四編)

(21) 着たツ切雀にしておくけれど、チウの音も出させねへ。(初編)

(22) 着た限雀お宿は何所ぢや、チウ／＼ちゆうつといはせて、早く焼鳥と出てへネ (四編)

『浮世床』『浮世風呂』に見られた汚い音は、例 (18) のように、口真似でゲップの音が2例見られただけである。例 (17) のような舌打ちや咳払い、息をのむ音などが多く表現され、話し方の癖を忠実に写し取ろうとしたことがうかがえる。例 (19) のような三味線の音の口真似は、『浮世床』や『浮世風呂』『東海道中膝栗毛』にも多く見られた。例 (20) のような動物の鳴きまねなどもあり、口真似をするのが当時の人の話し方の特徴ともなっている。例 (21) は「ぐうの音」と掛けたもの、(22) は雀のお宿の歌に合わせて雀の鳴き声をしているもので、『浮世床』と同様に言葉遊び的なセリフとなっている<sup>19</sup>。

以上のほか、「こんな咄もいやだ。ヘツ、ヘツ、鶴亀々々。(初編)」「鶴亀々々、フツ、フツ」ト袖をはらふ。(初編) など細かい音の描写も見られ、話し言葉で聞こえてくる音を細かく描写しようとしたことがうかがえる。

次にセリフの擬態語を見ていく。『浮世床』に倣って人物の様子や動き、心情、感覚を拾い出し、さらに『浮世床』にはほとんど見られなかった外見を表す語を加えた<sup>20</sup>。

外見：こつてり しゃんと すつかり ちよんぼり ばく／＼ ばさ／＼ びらしやら  
びら／＼

様子：あつば／＼ うぢ／＼ キウツと2 くれ／＼ こつくり ごつくり ころり  
じつと2 しゃア／＼4 ちらり にこ／＼ ぬかりん はき／＼ ぼつたり  
ひよろ／＼ おい／＼ べちやくちや ほつと2 ほつくり ポンと2  
まじ／＼ ゆる／＼

動き：あんと キト グイと2 ぐる／＼3 ざつぶり ジヤ／＼ じろり ずつと2  
ずつばと そつと2 ちやつと2 ちよいと2 ちよつこり づいと つんと  
どんと ぬつと ばつば2 ふら／＼ むしや／＼ むつくり めつちやに

心情：うんざり2 くさ／＼ しみ／＼ ハット びつくり4

感覚：がた／＼がた／＼ かつかり ずうつと ひや／＼ びり／＼／＼ ぶる／＼  
まじり／＼

まず、外見を表すオノマトペを見ると、「一寸銭湯へ行くまでも白粉こつてりだ (三編)」「襟足が能いから、しゃんとして剃榮がする (二編)」「衣装がすつかり極まる (二編)」「(嶋田も丸髻も) ちよんぼりと結つてある (四編)」「しはだらけのばく／＼婆さん (二編)」「手がばさ／＼渋紙のやうだから (二編)」「そんなにびらしやら化粧をして見な (三編)」「針よりちいさきびら／＼のかんざし (三編)」と使われている。多くが貶し言葉で、相手や自分の容姿を揶揄・自嘲している。ト書きにも外見を表すオノマトペが見られたが、『浮世風呂』

が話の内容に重きが置かれていたのに対して、『四十八癖』では人物描写に重きが置かれていることが、オノマトペ使用の面からも見て取れる。また、『浮世床』『浮世風呂』に多く見られた「話し方」を描写するオノマトペについては、『四十八癖』には「ぶい／＼」「べちやくちや」の2例が見られた。

次に、人物の様子や動きを表すオノマトペについて、用例が多いものや特徴的なものとして、①性格につながる語、②力強い動き、③死ぬことを表す語、④芝居や講談の語を取り上げて見ていく。①の（ ）内には意味を、②・④の（ ）内はオノマトペに係る語を示す。数字は複数例ある場合の用例数である。

- ①性格につながる語：あつば／＼（のらりくらし遊び歩く）　うち／＼（ぐずぐずする）  
くれ／＼（実直に働く）　しやア／＼ 4（図々しい）　にこ／＼（愛想がいい）  
ぬかりん（ぬけぬけと）
- ②力強い動き：ぐいと 2（にらむ・飲み込む）　ずつと 2（はいる・上がる）  
づいと（行く）　どんと（押しかける）
- ③死ぬこと：こつくり　ころり　ぼつくり
- ④芝居・講談の語：きと（見返る）　すつと（入る）　ずつば（射られる）  
ちやつと 2（刀を納める・来い）　とつと（悪い）　ぬつと（面出す）  
ぶい／＼（小言）

以上の語を用いた用例をいくつか挙げる。

- (23) 朝飯過の汁鍋までかみさんが洗つて仕廻ふ時分に、ぬかりんと帰つて来てしやア／＼と飯を食ふ（四編）
- (24) 委細かまはず戸をがらり、グイトにらみながら、ずつと内へ上がつて、（初編）
- (25) 今夜にもこつくり往くめへもんぢやアねへ。人間万事三十日は闇ス。（二編）
- (26) 寄せ給ア、ヘエとウ、いへば、梶原はア、きと見返エ、りイ、てエ、（三編）

例(23)の「ぬかりん」「しやア／＼」は、朝湯の後に髪結床に行って帰ってきた居候の平然とした様子を表す。こうなつてはおしまいだという意味で男が居候の話をしている中で描写されているのだが、話の中でオノマトペを用いて人物像を生き生きと描いている。例(24)は、以前夜中に帰った際に戸が閉まっていた朝まで立っていたことを聞いて、堂々と威勢よく戸を開けて帰ればよいと助言する場面である。一連の動作をオノマトペで表現し威勢の良さを表している。例(25)「こつくり」は突然死する様子を表すが、他に「ころり」「ぼつくり」も同様に用いられており、当時の江戸庶民が「死ぬこと」を俗語で表す例が多いことが窺われる。例(26)は、男が『源平盛衰記』を音読する場面である。『四十八癖』では会話のやり取りの中で、講談調で語ったり芝居をしたりする場面が多く見られた。「きと」は軍記物語の語りに、「ずつばと」「ぬつと」は浄瑠璃の語りに見られた語で、滑稽本等江戸

末期には古い語という意識があったのではないかと思われる。『浮世床』でも、浄瑠璃を語るセリフで、「よゝと打ち歎く傍には、数珠さや／＼と摺鳴しツゝ、(二編上)」のように、軍記物語で見られた中世のオノマトペが用いられている。

人物に関する語以外で特徴的だったのが、以下に挙げるような勢いをつけるオノマトペが多く見られたことである。いくつか例を挙げて見ていく。

勢いをつける語：グウツト　ぐつと 8　ざつと 4　さつぱり　しつかり 5　すつぱり 6  
つつと　とんと 3

(27) あすこでぐつと改正してくらし方を小体にしたうえで、おれなら得意まほりをして  
国々の荷主をすつぱりとのみこませるのよ。(三編)

(28) かゝアが持つてうせた物はきれいさつぱりにまげてしまつて(初編)

(29) けふも、うけたぞ／＼。しつかりうけさせた。(二編)

(30) 元日がくると大三十日がむねにつかへるから、おれが気にとんと弓断も透もない。

(初編)

例(27)は、店を立て直して暮らし向きをつましくしたうえで得意回りをして荷主を納得させる、という意味だが、「ぐつと」に「力をこめる」という本来の意味はなく、「すつぱり」とともに強調表現となっている。例(28)は、かみさんが持ってきたものをすべて質入れしてしまって、という意味だが、「さつぱり」は「きれいさっぱり」の語句で「すべて」の意味を強調している。例(29)は、今日も話をたっぷり聞いた、ずいぶん聞かせやがった、という意味であり、「しつかり」は「安定した」「堅固な」というもとの意味ではなく強調表現として用いられている。例(30)は大晦日が気になってしかたがないから、自分の気持ちにはまったく油断も隙も無いという意味で、「とんと」は強調表現として用いられている。セリフには、このように元の意味を表さずに、勢いをつけたり強調したりする働きのオノマトペが多数見られる。

### 3 漢語系オノマトペ

両作品には少数例だが漢語系のオノマトペ<sup>221</sup>が見られた。『浮世床』に4例、『四十八癖』に3例である。『浮世床』には、ト書きに「弁舌滔々として高慢を吐く(初編上)」「あたまはさかやきぼう／＼(初編上)」、セリフに「御佩刀はきめるシ、形はりうトしてゐるから(二編上)」「浪々踏々として歩いて来やした(二編下)」という例が見られた。『四十八癖』には、セリフに「家来けんぞく大勢をかゝへて、安閑としてゐるは(初編)」「船にのつて、琴三絃声色物まねをゆう／＼ときくこともない(二編)」「海鼠襟の合羽を来たやつが、黒縮緬の羽織でりう／＼してゐる(三編)」という例が見られた。

ここに挙げた7例のうち、ト書き部分に漢字で書かれた「滔々」は「弁舌滔々と」と慣用

的な表現であるが、同じく漢字表記の「安閑」「浪々躑々」はセリフで用いられており、漢語が日常語の中に溶け込んでいる様子がかがわれる。さらに、ひらがな書きされている「ぼう／＼」「りうと」「ゆう／＼」「りう／＼」は、日常語に溶け込む以上に、漢語の意識が薄れているように思える。「ぼう／＼」は現在でも「髭をぼうぼうとはやしている」「髪の毛がぼうぼうと乱れている」のように用いており、反復の語形が和語のオノマトペと同一であることから、すでに江戸時代に和語のオノマトペと同様に用いられているのではないだろうか。「ゆう／＼」も同様で、『東海道中膝栗毛』や浄瑠璃・歌舞伎脚本に人物描写として見られ、多くはひらがな表記（時に漢字表記）で用いられている。「りうと」「りう／＼」は『東海道中膝栗毛』『浮世風呂』には見られなかった語であるが、ひらがな表記されることで漢語の意味が薄れ、音の響きから「立派だ」「ぱりっとしている」<sup>註22</sup>という意味をイメージしていると考えられる。

なお、『四十八癖』の三編序（巻首）に「日月遅く寛に、べん／＼だらりと遣りたき物を」とあるが、この「べん／＼」は漢語の「便々」に通じるものであろう。『浮世風呂』では、ト書きに1例（「べん／＼との長湯」）、セリフに2例（「夜中までべん／＼と飲居らアな」「べん／＼と待たさかい」）あり、さらに、セリフには「おもしろくもねへ芝居ばなしを、べん／＼としてそのあげくは」という「べん／＼」が強調された語形も見られる。当時の庶民が日常語でよく用いていた漢語の一つであったようであり、そこから「べん／＼だらり」という語が派生してできたのであろう。「べん／＼だらり」は「だらり」という和語とともに用いられており、すでに漢語の意識はなくなっていると考えられる。『日本語オノマトペ辞典』でも、和語のオノマトペとして「べんべんだらだら」「べんべんだらり」が立項されている。

#### 4 式亭三馬作品のオノマトペ

今回調査した『浮世床』『四十八癖』と、先に調査した『浮世風呂』に共通した特徴を中心に、三馬作品のオノマトペの特徴をまとめる。三作品とも、作中のセリフの割合が高いためか、地の文・ト書きに比べてセリフのオノマトペが圧倒的に多く見られた。

地の文・ト書きでは、擬音語は作品により傾向が異なり、『浮世風呂』では銭湯らしい音が見られたが、『浮世床』では髪結床を表す音はなく、場面の状況を示す音が若干例見られた。『四十八癖』では、場面を表す音はなく、人物の動きに関する音が見られた。擬態語は人物の外見、様子、動きに関するオノマトペが各作品に見られた。

セリフを見ると、擬音語で特徴的と言えるのが、多種多様な笑い声、ゲップなどの汚い音、舌打ちや咳払いなどの表情音、三味線などの口真似、言葉遊びが見られることである。特に汚い音に関しては、『浮世風呂』『浮世床』の二作品に多く見られた。擬態語は、三作品ともに人物の様子や動き、心情、感覚に関するオノマトペが見られた。『浮世風呂』『四十八癖』では外見を表す語も多い。セリフの中で人物描写が生き生きとなされていることがわかる。

また、オノマトペが勢いをつけるための一種の強調表現として用いられる例も多く見られる。

なお、漢語系オノマトペが各作品に少数例だけが見られる。「べんべん」「ほうほう」「りうりう」など[ABAB]型の語は、和語のオノマトペと同じような意識で用いられていたと思われる。

## おわりに

式亭三馬の滑稽本のうち、『浮世床』『四十八癖』を取り上げて、作品中のオノマトペの特徴を見てきた。すでに十返舎一九の『東海道中膝栗毛』のオノマトペの特徴をまとめているため、滑稽本というジャンルのオノマトペの特徴が見えてきたところである。今後は、滝亭鯉丈の『花暦八笑人』や梅亭金鷲の『七偏人』など、他の滑稽本の調査を行い、滑稽本のオノマトペの特徴を明らかにしていきたい。

## 【注】

- 1 拙稿(2022)「『東海道中膝栗毛』に見られるオノマトペ」『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』9巻1号、拙稿(2023)「式亭三馬『浮世風呂』に見られるオノマトペの特徴」『佐賀大学教育学部研究論文集』第7集第1号。以下、『東海道中膝栗毛』『浮世風呂』のオノマトペに言及する場合は、これらの調査によるものである。
- 2 例えば「ひよつと(万一の意味)」は『日本語オノマトペ辞典』「ひよつ」の項目②に「何かのはずみでものごとが起きるさま。万一。ひよつとして。」とあり、「ひよつと落たらどうする」という『浮世床』の用例が掲載されているため、オノマトペと判断した。「とつと」は『古語大辞典』に「はなはだしいことを表す擬態語から」と記述されているため、擬態語と判断した。「とんと」は、『角川古語大辞典』に「①擬態語。事のなされるのがすばやいさま。急にすっかりそうなるさま。」とあり「②転じて、事や状態が徹底しているさま。すっかり。まったく。」とある。②の意味は擬態語から転じているが、意味上は「とつと」と同じであり、もとは擬態語であることから、音象徴性が感じられる語として、ここでは二語とも擬態語と判断した。
- 3 本田康雄校注、1982年発行、2003年第二冊による。凡例によると、『浮世床』は吉田幸一氏蔵本を底本とし、『四十八癖』は国立国会図書館蔵本を底本としている。表記等は新潮日本古典集成本に従うが、「びづくり」「がづかり」は「びつくり」「がづかり」として扱う。
- 4 『日本古典文学大辞典 簡約版』146頁「浮世床」の項(執筆: 本田康雄)。
- 5 擬音語・擬態語で判別しがたい語もあるが、ここでは便宜上どちらかに分類した。例えば「米をごし△」という場合は音を表し得るとみなして擬音語に分類した。また、『浮世床』では、セリフ内で分かち書きされている箇所があるが、これらはセリフに含めた。
- 6 「かし本やより借本にて見る人、尤も封切は価が貴きゆゑ、ずつとのあとで見る人なり。(二編上)」と用いられており、程度を強める意味で用いられている。
- 7 様子と動きは判別しがたい語があるが、便宜的に動的な動きを伴う場合に「動き」とした。たとえば「よろ△としながら来たり」は歩く様子を表すので動きに分類し、「敷居のきはにてひよろ△となり」はその場でよろめいている様子にとらえて様子に分類した。以下の項でも

同様である。

- 8 注5でも触れたが、本を音読する途中に茶々を入れるセリフをト書きのように分かち書きにする箇所（二編下、新編日本古典文学全集本 p175～178等）もセリフとした。なお、『浮世風呂』は四編、『浮世床』（式亭三馬作）は二編という分量の違いもあるかと思われる。
- 9 舌打ちの「ちょっ」は『現代擬音語擬態語用法辞典』に、「えへん」は同辞典と『日本語オノマトベ辞典』に掲載されている。なお、「へんお人柄だの」のような感動詞「へん」は扱わない。
- 10 筆者の調査では1例だけ外見に関わる擬態語が見られた。「鍬形打つたる五枚じころの兜をざつくと着殺し、拾一かん半天股引（初編上）」と講談調で語られるセリフに出てくる「ざつくと」である。古典集成本の訳には「すらりと着つぶし」とある。
- 11 「そろ／＼」4例中2例は人物の様子ではなく状況を表すため取り上げない。
- 12 古典集成本の77頁にある注二十三に「意気込みを失って沈黙した」と解説されている。
- 13 『日本語オノマトベ辞典』参照。
- 14 『日本古典文学大辞典 簡約版』863頁「四十八癖」の項（執筆者：本田康雄）。
- 15 『浮世床』は自序から二編下末尾まで挿絵頁を除くと163頁、『四十八癖』は195頁である。
- 16 この1例は、「何や何がしといふて、きつとした世わたりの業もあれど（二編）」という地の文の擬態語である。人物を直接描写していないが、家業のことを「きつとした」（=きちんとした）と表現しており、大きく見ると人物描写に関わりがあると言える。
- 17 『江戸時代語辞典』986頁「ト書き」の項。
- 18 「アハ、、、」と「アハハ、、、」、「ハ、、、」と「ハ、、、ハ、」は、表記の違いはあるが同じ語とみなした。
- 19 擬音語だけでなく擬態語でも「すってん童子」などの言葉遊びが見られる。この場合は「酒呑童子」を面白可笑しく表現しているだけなので、オノマトベとしては扱わない。
- 20 例えば「ぐる／＼」の場合、「丸いものが循環してぐる／＼とめぐる（初編）」のようにものの様子を表す例は除き、「ぐる／＼経めぐつて（初編）」のように人物の動作を表す例を拾っている。
- 21 本稿で扱う漢語系オノマトベは、金田一春彦（1978）が漢語の擬音語・擬態語を形態から分類した項目のうち「漢字一字のもの」「同じ語根を重ねたもの」「同じ子音の拍を重ねたもの」「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」とする。ただし、今回調査した二作品には子音の拍を重ねたものは見られなかった。
- 22 『浮世床』の「りうト」には「いかにも立派な」（p146）という口語訳が、『四十八癖』の「りう／＼してゐる」には「ぱりっとしている」（p295）という口語訳がされている。

#### 【引用・参考文献】

- 天沼 寧（1977）『『東海道中膝栗毛』に使われている擬音語・擬態語について』『近代語研究』5集、武蔵野書院
- 穎原退蔵・尾形侑（2008）『江戸時代語辞典』角川学芸出版

- 小野正弘（2007）『日本語オノマトベ辞典』小学館
- 金田一春彦（1978）「擬音語・擬態語概説」浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 酒井知子（2019）「『浮世風呂』のオノマトベについて」『立教大学日本文学』121号
- 長崎靖子（2018）「式亭三馬の言語描写—センボウを資料として—」『近代語研究』20集、武蔵野書院
- 中田祝夫（1993）『古語大辞典』小学館
- 中村幸彦・阪倉篤義・岡見正雄（1982～1999）『角川古語大辞典』角川書店
- 日本古典文学大辞典編集委員会（1986）『日本古典文学大辞典 簡約版』岩波書店
- 飛田良文・浅田秀子（2018）『現代擬音語擬態語用法辞典 新装版』東京堂出版
- 本田康雄（1982）「解説 暮しを写す—式亭三馬の文芸—」『浮世床 四十八癖』新潮社
- 山本 淳（2005）「式亭三馬作中における白圈点の使用について」『米沢国語国文』（山形県立米沢女子短期大学）34号

付記：本稿は科学研究費基盤研究（C）（一般）「近世の滑稽本・談義本に見られるオノマトベの記述的研究」（課題番号：22K00589）の研究成果の一部である。



【稿末資料】各作品に見られたオノマトベ

\* 1拍・2拍語は引用の助詞「と」まで含めた。／「とつちり者」のように名詞に係っているものは名詞まで取った。／漢語系オノマトベは和語の後に〔 〕書きで示した。／複数例見られた場合は語の後に数字で示した。／同じ語で表記が複数例見られるものは一つにまとめた。

表1 『浮世床』のオノマトベ

<p>&lt;地の文&gt;  <b>擬音語</b>：ゴラン  <b>擬態語</b>：べつたり</p>
<p>&lt;ト書き&gt;  <b>擬音語</b>：ウ、、、引 キャン トンと トン／＼／ ポンと ワアイ わつと  <b>擬態語</b>：ぎよつと けろり ずつと3 そつと2 ちよいと とつちり ばらり びくり びつくり ひよろひよろ ふつくり べたり／＼ むしやくしや よろ／＼ [滔々と ほう／＼]</p>
<p>&lt;セリフ&gt;  <b>擬音語</b>：アハ、、、8 アハ、、、3・アハ、、、 エヘ、、、 ハ、ハ、、、7 ハ、、、14 ハ、、、アハ、、、ヲホ、、、 ハ、、、ヘ、4 ヲホ、、、4          アツア ウ、、、引 ウン／＼ かや／＼2 カリ／＼ キャツ／＼ ぎやつと ゲいと ゲイ引 ゲロ／＼／＼ さや／＼ ざわ／＼ざは／＼ すて、こすて、こ すて、こてんでこてんとんとん チウ／＼のチウ チョツ8 チョツ／＼／＼／ ツ、テン／＼ テテンテン／＼ ニヤア バタ／＼／＼ ピヨイ フウ ヘツエ、ヘツエ ほつ／＼ よ、と ワアイ2 ワイワツと2 ワワンワン／＼／＼／＼ ワンと わんと エヘン  <b>擬態語</b>：うかり うよ／＼ うろ／＼ がた／＼がた／＼ がつかり ギウ2 きよろり きり／＼2 きり、ちゃん くさ／＼ ぐつと4 くる／＼／＼ くるりくるり こつくり ごつちや さアつぱり さつく さつさと3 ぎつと さつぱり3 しつかり4 しつくり しゆつと ズウイ スウ すきと すつくり ずつと2 ぞく／＼ そつくり2 そつと2 そろ／＼4 たつぷり だら／＼／＼ たんと2 ちゃんと ちよいと5 ちらり2 てつきりとつくり とつと5 どつと2 どろ／＼ とんと3 にこ／＼2 ぬけ／＼ ばく／＼ ぱつちり はつと びくと 恠り2 ぴよくり ひよこ、ひよこ／＼ ひよつくり ひよつと2 ひよろ／＼ ひらり ぴんと ふいと ぶつ／＼ぶつ／＼ ふつくり ぶら／＼ べたり ぺら／＼ぺら／＼ ぼい／＼ ぼいと ぼきり ほや／＼ ぼんと2 まご／＼ むつくり むつと ゆらり／＼ ゆる／＼ ゆるり わんぐり2 [りうと 浪々踏々と]</p>

表2 『四十八癖』のオノマトベ

<p>&lt;地の文&gt;  <b>擬音語</b>：ばた／＼  <b>擬態語</b>：きつと ごし／＼ ずうい たつぷり ちよいと どつび／＼ ぱち／＼ ぱらり ぴら／＼</p>
--

<ト書き>

擬音語：がたびし カチ／＼2 カチ／＼／カチ／＼／／ から／ キイ／ ぐわ  
つたり トン／ トン／／／3・トン／／／1 ばた／／3 バタリ

擬態語：ぐつと ころり サアト ずつと2 そつと ツイと びつくり6 ひよいと2 ぶ  
ら／ ぶらり べつたり ぺろり ぼち／ むしやり／

<セリフ>

擬音語：アハ、ハ アハ、、、2 アハ、、、7・アハハ、、、1 アハ、ハ、  
ハ、、、5 ハ、、、10・ハ、、ハ、2 ヘ、ヘン ヲホ、、、 ヲホ、、、  
ウ、ウツ4 エヘン3 おぎやア／ かあ／ がらり ゲイ引2 チウ ギウと ギウ  
ツ チウ／ チウ／ちゆうつ チヨツ9 チヨン チリ／チリツ チリリン／ちやん  
／ちやん／ ツン／ どさり トンと トン／ ニヤアフウ ハツア4 ハツアハツ  
ア ぱり／ ぴしやり ひうどろんこひう フツ、フツ フツ、フツ、フツ フウ フン  
ヘツ、ヘツ ポンと

擬態語：あつば／ あんと うざ／3 うぢ／ うんざり2 がた／がた／ がつ  
かり がつしり からり キウツと2 きつしり キト きり／2 グイト2 グウツト  
くさ／ ぐつと8 くり／坊主2 ぐる／5 ぐるり くれ／ こつくり ごつくり  
こつてり ころり ざつと4 さつぱり ざつぶり じつと・自若(じつと) しつかり5  
しみ／ “、ジヤ／ しやア／4 しやんと シュツと じろり すつと ずつと2 ず  
うつと すつかり ずつばと すつぱり6 ずらり そつと2 そつくり5 そろ／2 た  
つぶり たんと2 ちやつと2 ちよいと2 ちよつくり2 ちよつこり ちよつびり ちよ  
んぼり ちらり づいと つゝと つんと てつきり3 とつと2 どつさり とつちり者  
とんと3 どんと3 にこ／ ぬかりん ぬつと はき／ ハツト ばく／ ぱさ／  
ばつたり ばつぱ2 びつくり4 びつしやり ひよつと ひや／ “、ひよろ／ びらし  
やら びら／2 ぴり／／ ぶい／ ふら／ ぶる／ べちやくちや ほつと2  
ぼつきり ぼつくり ポンと2 まじ／ まじり／ むしや／ むつくり めつきり  
めつちや やみ／ ゆさ／ ゆる／2 りんと2 [安閑と ゆう／と りう／し  
て]